



2011年5月25日放送

## 漢方医人列伝「大塚 敬節」

慶應義塾大学 漢方医学センター 准教授 渡辺 賢治

漢方医人列伝 29回は昭和漢方の巨人、大塚敬節先生についてお話しします。大塚先生は一般的にはケイセツと呼ばれておりますが、これは号であり、本名は同じ字ですが、「よしのり」です。ここでは一般的な「けいせつ」で呼ばさせていただきます。

今の医療用漢方製剤を語る上で大塚先生をおいては話できません。いわば漢方がこれだけ発展した基礎を築いた人であります。しかし、その人生はまさに波乱万丈でした。詳しくは日本経済新聞社の「私の履歴書」の連載をまとめた「漢方ひとすじ」をお読みになってください。

生まれは1900年2月25日、高知県高知市です。大塚家は、もともと山内侯が遠江から土佐に来た時についてきました。曾祖父の希齋から医師で、祖父の恭齋、父の恵迪そして敬節と、医師としては四代目に当たります。敬節は、はじめ医師になるのを嫌がり、中学卒業後、高等工業学校の冶金科に進学しました。その後医師になると決心をし、熊本医学専門学校に入学しております。医専卒業後、高知の武田病院に勤務しましたが、1923年（大正12年）に父恵迪が亡くなったため家業の修琴堂大塚医院の看板を継ぐことになりました。

1926年（大正15年）には長女を疫痢で亡くします。このことは師匠の湯本求真と似た経験で、西洋医学に対する不信感を抱きました。1927年（昭和2年）に中山忠直の「漢方医学の新研究」を読んで漢方というものを知り、その後独学で漢方の本を読みあさりしました。その中には湯本求真の『皇漢医学』もありました。

その頃の治験で痙攣の子を治療したことがあります。10歳になる女の子で日に10〜20回痙攣を起こす。そのたびに尿を失禁する。右手足が動かず寝たきりでした。敬節先生が往診してみると目の前で痙攣が始まり、それが済むとひっきりなしにあくびをしました。そこで甘麦大棗湯を煎じて与えました。そうしますと2週間も飲むと痙攣がだんだん減ってきて、3〜4カ月で痙攣はすっかり治まってしまいました。そのうちに立って歩けるようになり、学校へも行くようになったということです。

このような多くの驚くような経験を重ねるうちに、本格的に漢方を勉強したくなりました。当時漢方が最も衰微していた時代です。漢方の師といっても限られていましたが、湯本求真先生を選びました。1930年（昭和5年）、生まれたばかりの長男大塚恭男を置いて上京しました。31歳の時です。当時流行っていた高知の修琴堂大塚医院を閉じることは親族から大いに反対されたようですが、それにも増して漢方に対する情熱が大きかったのです。

湯本求真は古方一本でしたが、「偉大な師匠というのは規矩を示すが、こまごまとした事は教えない」という信念で特に教えることはしなかったようです。ぶっきらぼうな先生で患者数も少なかったようです。1年間の修行の後、湯本先生の薦めに従って、神楽坂で開業しました。はじめの3年間は患者はほとんどいなかったようですが、徐々に患者が増え、盛業となったようです。しかし、時代は戦争へと突入していきます。神楽坂の医院は1945年（昭和20年）5月25日の空襲で焼けてしまい、終戦直後の9月に西荻窪に移りました。

そして昭和30年に新宿区三栄町の大塚医院に移り、そこで80歳の生涯を閉じるまで漢方一筋の診察を続けました。

公には1957年に日本東洋医学会理事長に就任。1972年には北里研究所東洋医学総合研究所が設置され、初代の所長を務めております。また、1978年には長年に亘る漢方の発展に貢献した業績により日本医師会最高優功賞を受賞しています。

大塚敬節の業績を語る場合、衰退した漢方を復興させた業績が最も先に挙げられるべきでしょう。大塚は漢方の復興を早くから目指していました。そこには二人の精神的指導者の影響があるように思います。暁烏敏と権藤成卿の二人です。暁烏敏は大正年間に活躍した仏教思想家でしたが、熊本医専の時代に知り合い多くの影響を受けています。なかでも「自分がどうしてもやらなければならぬことがあったら、全身全力でぶつかれ。その結果どうしてもだめなら考えなおせばいい」という言葉は大きな影響を与えたようです。権藤成卿は大塚敬節が東京で開業した頃からの付き合いで、「古方には排他癖がある」「反対学を学べ」ということを口を酸っぱくして言われたようです。

血気盛んな若き敬節は湯本求真の影響を受けて古方一本で、他の学派を攻撃することもあったようですが、権藤に出会ってからは、「ただでさえ数少ない漢方家がいがいみあってはだめだ」ということで、後世派の矢数道明、折衷派の木村長久氏らと親交するようになりました。

このことは古方一本の恩師湯本求真の不興を買ったようです。あるとき漢方医学の復興

について大塚先生が湯本先生に質問したところ「漢方是一部の篤志家のものだ。普及すれば邪道に落ち込み、墮落する」と言われたそうです。しかし、敬節先生は自分の信念を貫き、学派を超えた交流を進めます。1934年（昭和9年）に日本漢方医学会が結成され、月刊『漢方と漢薬』が創刊され、漢方の復興が始まります。この動きは偕行学苑の結成、拓殖大学漢方医学講座へと続き、学派を超えた漢方の復興につながります。

この敬節先生の考え方そのものが現在の漢方医学の基礎をつくったといっても過言ではありません。敬節先生は「唯我独尊ではいけない。漢方だけを正しいとする思想は結局西洋医学のみを正しいとする西洋医学者と何ら変わることがない」と述べています。大阪医大の大澤仲昭先生から聞いた面白い話があります。敬節先生の長男恭男先生と大澤先生は東大時代の同級生ですが、敬節先生に「肺炎の漢方治療は何ですか？」と聞いたところ「そりゃ君ペニシリンだよ」と答えたとのこと。日常の診療では検尿をルーチンで行っており、漢方診療三十年でも肺の聴診を熱心にやった様子が見えます。

そこには漢方だけを復興するという狭量な心でなく、現在社会の中での漢方の役割を見つめた透徹した考えが生涯を貫いています。この幅広さはやがて民間薬にも向かい、特に戦後生薬が入りにくくなったときに、わが国に残されている民間薬のうちでも有用なものを探します。これは『漢方と民間薬百科』にまとめられています。

大塚先生の著作は多数ありますが、初学者にお薦めなのは創元社の『漢方医学』です。これは漢方の入門書としては大変分かりやすく、私も学生や研修医にはまずこれを読むことを薦めております。『漢方診療医典』は日常的診療のハンドブックとして重宝します。『漢方診療三十年』は診療録ですが、敬節先生のすごいところは、いいことばかりでなく失敗例もきちんと示していることです。われわれは成功例よりも失敗例から学ぶことが多いので、大塚先生の本は本当に勉強になります。

敬節先生の業績の中で特筆すべきは今の医療用漢方製剤の元をつくったことでしょう。これには当時の日本医師会会長武見太郎先生との親交があります。武見太郎先生は北里研究所に東洋医学総合研究所をつくることにも奔走され、初代所長に敬節先生が就任されました。

1980年10月15日、北里東洋医学研へ出勤する直前に脳卒中に倒れましたが、一番はじめに駆け付けられたのも武見太郎先生であり、葬儀委員長も務められました。武見太郎先生という理解者がいてはじめて漢方の復興が完結したといっても過言ではありません。

敬節先生は短歌をつくり文学にも通じていましたが、故郷高知の五台山の牧野記念植物園にある碑に刻まれている代表的な短歌を紹介します。「術ありて 後に学あり 術なくて 咲きたる学の 花のはかなさ」

生涯漢方を愛し、それが社会に必要なものだという信念で漢方の復興を成し遂げた敬節先生が「術」としての漢方を重んじたことがよく分かる短歌です。

敬節先生については多くの資料があります。今日の話で足りないところは是非とも敬節先生の著作をお読みください。